

特集：音／声の文化史

音や声は一瞬にして消えゆく瞬間的なものである。それゆえ、一度として同じものを聞くことはあり得ない。たとえば音楽における楽譜も、あくまでそこに記された音を再現するためのものであり、まったく同じ音を復元するのではない。そうして、古代以来、音や声をともなった音楽は、その場その場の芸術として、人々に受容されてきた。しかし近代に入ると、産業革命にともなって技術革新が進み、音や声が記録され、複製されることで、そのあり方も大きく変化することになる。それまで以上に、同じ音や声が広がっていく契機にもなったのではないか。また、時期を隔てて、同じ音や声を聞く、そうした体験を有することにもなったと思われる。

そして、音や声は単に芸術としてあっただけでもない。そこには、その時代の社会のあり方が刻印され、時には政治性をも持ち合わせていた。近年、人文科学ではこうした音や声に注目した研究が数多くなされ、成果を挙げてきた。たとえば歴史学では、その当時に書かれた史料の分析が主な研究手法であり、政治史や経済史などが以前は主流であったが、社会史が登場するなかで、次第に文化、そして音や声にも焦点が当てられた研究がなされるようになってきた。音や声にまつわる史料の分析だけに留まらず、その社会的背景に関する史料が検討され、そして音や声そのものを歴史学的に分析する方法も提起されている。音や声によって、文学や社会学など、様々な分野との学際的な研究が進んでいるのも特徴である。

本特集では、そうしたこれまでの人文科学・社会科学の研究成果に学びながら、近現代における音や声、そしてそれにまつわる問題について考えたいと思い、企画を立てた。2022年1月29日、30日にオンラインで開催した同題目のシンポジウムを基に、その報告者と参加者から寄稿してもらった。

同シンポジウムでは、セッション1「国家・政治との関係性のなかで」において、音や声と国家・政治との関わりに焦点を当てた。国家に包摂されつつ、一方でそこから脱却しようとする音や声。また、音や声には常に社会や時代との関係がある。このセッションでは、音や声と国家・政治との関わりを考えた。

セッション2「境界領域・多文化との接触のなかで」では、近代日本における植民地や占領地と日本の関係に特に焦点を当てた。近代に入り、日本はいわゆる「鎖国」状態から近代西洋社会の仲間入りをする。そして、対外膨張を続けていくが、そうした時に生じたのが、それまでの日本という領域の変化にともなう、様々な文化との接触であり、それは時には軋轢なども生み出した。音や声ではそれはどのような状況なのかを考えた。

セッション3「ポピュラーカルチャー・大衆文化のなかで」では、文学や映像、音楽など私たちが日常で楽しむ文化のなかで、音や声はどのような位置にあり、表現されているのか。様々な文化が近現代の大衆社会や消費社会の発展とともに展開されているが、そのなかでの音や声の問題を考えた。それは、単に音や声にとどまることはなく、身体性をともなったもの、聴覚を揺さぶるもの、そうした側面も有していた。

本特集でもその問題を引き継ぎ、近現代における音や声の問題群、人文科学・社会科学における音や声の研究のあり方を考え、その意義を検討する。